２　木造不動明王立像（もくぞうふどうみょうおうりゅうぞう）　１躯　［有形文化財（彫刻）］

［所在地］　葛城市當麻 1263 番地

［所有者］　當麻寺

［法　量］　像高 170.7 ㎝

［時　代］　平安時代後期（12 世紀）

［概　要］

當麻寺に伝来した等身大の堂々たる不動明王像で、頭体を通してクスノキとみられる広葉樹１材から彫出される。近年まで金堂の本尊弥勒仏像の前に安置されていたが、現在は講堂の須弥壇西側に祀られている。

巻髪（けんぱつ）で立ち姿の不動明王像であり、頭頂の莎髻（しゃけい）、左に垂らす辮髪（べんぱつ）、天地眼（てんちがん）、上下に引き違える歯牙といった外見上の特徴は、９世紀末頃に台密の安然が説いた「不動十九観」に基づくものである。この姿の不動明王像は、院政期以降、盛んに造像されるようになり、県内にも 12 世紀頃に制作された優品が伝わっている。

本像もまたなだらかな衣文処理などに平安時代後期の作風が認められるが、大ぶりな頭部や目鼻立ち、腹部から下半身にかけての充実した肉取りは、均整のとれたプロポーションを示す 12 世紀の優美な作例とは一線を画すものである。一木造で背刳りを施す構造は古式である一方で、強い腰の捻りなどに次の鎌倉時代の萌芽も認められる。本像は、平安時代にさかのぼる遺品として貴重であるとともに、不動明王立像としては県内最大級の大きさを誇る作例として注目される。